

堀河院中宮と堀河中宮

著者	竹下 豊
引用	百舌鳥国文. 24, p.13-24
URL	http://doi.org/10.24729/00005046

堀河院中宮と堀河中宮

竹下 豊

一

堀河天皇内裏歌壇の頂点的催しが『堀河百首』であることは、言を俟たない。その堀河天皇内裏歌壇の形成に、大きな役割を果たしたひとりが、堀河院中宮篤子内親王である。『CD-ROM 和歌文学大辞典』の「堀河院中宮」の項に、私は次のように書いている。

堀河院中宮 ほりかはみんのちゆうぐう（平安時代中・後期歌人）

堀河天皇中宮篤子。康平三1068年〜永久二1114年二〇月一日、五五歳。後三条天皇第四女、母は贈皇太后茂子。白河院の同母妹。陽明門院養女。延久五1073年三月一日に賀茂齋院に卜定、同年五月七日には父の崩御により退下。寛治五1091年一〇月二五日に堀河天皇に入内、同七年二月二日立后（中右記）。数奇風流を好む堀河天皇および中宮篤子を中心とした近臣近習より成る雅宴グループが存在し、そのまま堀河院歌壇を形

堀河院中宮と堀河中宮

成していた。中宮方の職事として源国信・藤原仲実、女房に中宮上総らの歌人がおり、数多くの歌会・歌合を催す。また仲実が勸進者と考えられる『永久百首』は、堀河天皇と中宮篤子内親王追善のためのものであった。

篤子内親王については、以上でほぼ尽きているのではないかと思われる。

一方、「堀河（川）中宮」と呼ばれた方がいる。

堀河中宮、おそくまゐり給しに

おほかたの春はきぬるをいかなれば下まつ花のおそくさくらん
（円融院御集・二〇、玉葉・恋二・一三七八）

堀河中宮かくれ給て、わざの事はてて、あしたに

よませ給ける

おもひかねながめしかども鳥辺山はてはけぶりもみえずなりなき
（円融院御集・六二、詞花・雑下・三九五）

堀河中宮おはしまさでのち、円融院にまうされける
二品尊子内親王

かめのうへの山をたづねし人よりもそらにこふらむ君をこ
 ぞおもへ

御返し

円融院御歌

たづぬべきかただにもなきわかれにはこころをいづちやら
 むとぞおもふ

(統古今・哀傷・一四六三、一四六四)

この「堀河(川)中宮」は、右の四首が示すように、円融天
 皇皇后であつた皇子である。そして、皇子は堀河関白太政大臣
 兼通女である。『大鏡』には、

このとの(筆者注―兼通)ゝ御女、式部卿の宮もとひらの御
 子の御女の御はらのひめぎみ(筆者注―皇子)、円融院の御
 時にまいり給て、堀河中宮と申き。

(一 太政大臣兼通忠義公)

とある。また、皇子に仕え、後に尼となつて遁世した小馬命婦
 の家集、『小馬命婦集』(私家集大成の底本である香陵部藤伏見宮本
 (伏・一四五)の巻末の注記に、

堀河中宮皇子

堀河関白兼通女

円融院后

とある。

さらに、『大日本史料』所引の『大鏡』の「裏書」には、次の
 ように記す。

中宮皇子事

忠義公女、母式部卿元平親王女、或云、兵部卿有明親王

女云々、

天延元年二月廿九日入内、同四月七日為女御、同七月一

日為皇后、号中宮、天延二年六月三日崩于堀河院、年卅

天延二年(九七九)六月に三十三歳で崩御しているから、生年

は天曆元年(九四七)である。「堀河中宮」という呼称は、皇子
 の父の藤原兼通邸であつた堀河院に因んだものであろう。なお、
 皇子の文化圏については、高橋由記氏の論がある。

二

勅撰集を見ると、作者を「堀河院中宮」または「堀河中宮」
 とする歌が、次の三首ある。

はなみにまかりける人に

堀河院中宮

① 先だつる心をしらで桜ばなたづねぬ人になりやしぬらん

(統古今・春下・一二七)

上総、おやの思ひにてやよひの比こもりて侍り

けるにつかはしける

堀河院中宮

② 墨染の袖のなみだと散る花といづれか人のしばしとむらむ

(統後拾遺・哀傷・一二三六)

黒戸のまへに菊をうゑられたりけるを

堀川中宮

③ 咲きぬればよそこにこそみれ菊の花天つ雲みの星にまがへて

(新拾遺・秋下・五一九)

これらの歌については、その扱いがさまざまである。手近な辞典類などを見ると、次のようになっている(初版の刊行年順)。

※『八代集全註3』(山岸徳平編 有精堂 昭和三五・七)「勅撰

作者部類」

堀河院中宮

嬪子。忠
義公女

統古春下1 統後拾哀1 新拾秋下1 堀川中宮

※『和歌文学大辞典』(伊藤嘉夫他六名編 明治書院 昭和三七・

一一)「勅撰作者部類」

堀河院中宮ほりかわいん (嬪子。忠義公女) 円融皇后, 天

元2没, 33。統古堀川院中宮127 統後拾1229

堀河中宮ほりかわち (旧部類不見) 後三条院の皇女篤子内

親王。堀河院の女御。永久2没, 55。

新拾519

※『勅撰集付新葉集作者索引』(名古屋和歌文学研究会編 和泉書

院 昭和六一・七初版)「勅撰集篇 女子部」

堀河中宮ほりかわの (新拾) 519 ◎堀河院中宮は立項

せず。

堀河院中宮と堀河中宮

作者名が①②では「堀河院中宮」、③では「堀河中宮」(堀川

院中宮)「堀川中宮」という表記もあるが、以下、「堀河院中宮」「堀河

中宮で統一する」となっているのにもかかわらず、『八代集全註

3』では①②③のすべてを嬪子の歌とする。また、「堀河院中宮」

を「嬪子」のこととし、『新拾遺集』では「堀河中宮」の名で出

ているとする。つまり、「堀河院中宮」と「堀河中宮」を同一人

物とし、嬪子のことであるとしているのである。

『和歌文学大辞典』では作者名の違いを考慮している。しかし、

従来の『勅撰作者部類』には見えない「堀河中宮」を補ったの

はよいが、「堀河院中宮」は嬪子で、「堀河中宮」は篤子内親王

であるとす。

また、「勅撰集付新葉集作者索引」は作者名表記そのままに、

③の『新拾遺集』の一首のみを「堀河中宮」の歌とし、①②の

作者である「堀河院中宮」は立項せず、「堀河中宮」と同じとし

て扱っているのかどうかはわからない。

いま三例を挙げたが、①②③の歌の作者は誰か、具体的には

嬪子か篤子内親王か、という問題、「堀河中宮」と「堀河院中宮」

が同一人物か否か、否とすれば「堀河中宮」は嬪子か篤子内親

王か、「堀河院中宮」は?といったような問題を巡って、混乱の

あることがわかる。これらの問題は、最近も尾を引いていて、

間違つた言及もあるのであるが、それはまた、本論文の最終節で検討するとして、何はともあれ、①②③の歌の作者を検討してみよう。

二

まず、①の『統古今集』の歌を見てみよう。

はなみにまかりける人堀河院中宮

① 先だつる心をしらで桜ばなたづねぬ人になりやしぬらん

(統古今・春下・一二七)

この歌は他出資料で、『二条太皇太后宮大式集』に贈答歌として見えているうちの贈歌である。

中宮のだいばんどころより

さきだつる心をしらでさくらばなたづねぬ人になりやしぬ

らん

御返し

心こそさきにたつとも山ざくらいとかばかりのにほひをば

みじ

(二八、二九)

詞書から見て、『二条太皇太后宮大式集』は『統古今集』の直接の採歌資料ではないようである。

二条太皇太后宮は白河天皇の第三皇女で、堀河天皇の同母姉

であつた令子内親王のことである。承暦二年(一〇七八)五月十八日誕生。斎院に卜定されたが、後に病により斎院退下。嘉承二年(一一〇七)甥の鳥羽天皇即位に際し、准母となり皇后宮に冊立された。その後、長承三年(一一三四)三月十九日、太皇太后に昇り、二条太皇太后・二条大宮と呼ばれた人である。天養元年(一一四四)四月二十一日、六十七歳で崩御(傍線は筆者、以下同じ)。

二条太皇太后宮大式は、令子内親王に仕えた人であるから、その家集の『二条太皇太后宮大式集』に出てくる「中宮」は、時代的にみても篤子内親王である。そして、『統古今集』の作者名が、「堀河院中宮」となっていることを確認しておきたい。

なお、森本元子氏³⁾はこの『二条太皇太后宮大式集』の二首を、「令子斎院御在任中」の歌として掲げている。

次に②の『統後拾遺集』の歌に移ろう。

上総、おやの思ひにてやよひの比こもりゐて侍り

けるにつかはしける

堀河院中宮

② 墨染の袖のなみだと散る花といづれか人のしばしとむらむ

(統後拾遺・哀傷・一一三六)

この歌も他出資料がある。

上総おやのおもひにて、やよひのころ、こもりゐ

て侍りけるにつかはしける 堀川院中宮

墨染の袖のなみだど散る花といかでか人のしほしとむらん

御返し 上総

散り残る花はあれども山里にとまらぬものは涙なりけり

(万代集・雑五・三五二九、三五三〇)

「いづれか」と「いかでか」の違いはあるものの、『統後拾遺集』と『万代集』は詞書が一致し、『万代集』の贈歌だけを『統後拾遺集』が採った可能性も考えられる。『万代集』では、親の喪に服して、家に籠っている上総に、喪服の袖を濡らす涙と散る花はとどめようがないのに、どうして人(あなた)はしばしとどめようとするのでしょうかと、堀河院中宮が歌を贈ったのに対し、散り残っている花はあるけれども、山里で籠居している私には、親を失った悲しみの涙はとどめようもないという上総の返歌が載せられている。『統後拾遺集』では、「涙と散る花のどちらをとどめようとして家に籠っているのかと尋ねる歌を、堀河院中宮が贈ったということになる。

いずれにしても、この上総は歌人であって、堀河院中宮篤子内親王家女房であった上総であると思われる。この上総には、森本元子氏⁴⁾が指摘されたように、『夫木抄』に、

堀川院中宮上総

春風のふけひのうらにちる花をさくらがひとてひろふけふ
かな

此歌は家集云、中宮にて桜のちるを人人ふところひろひしを、顕綱朝臣のもとより、ちりたる花を箱のふたに入れておこせたりしかばよめると云云

(巻四・春四・一四四九)

とあって、かつて家集が存在していたようであるが、現在は水府明德会彰考館蔵の近世写本が存するのみである。しかも、当該本は外題を「清少納言集」とし、墨付第一葉が清少納言集で、中宮上総集は、第二葉と第七葉となっており、中宮上総集の本文の間と後に皇太后宮大進集の本文が存するという、錯簡の状態⁵⁾で伝えられている由である。現存歌数は計一首であるが、上句を欠いたり、詞書に脱落があつたりで、詞書・歌ともに完全なもの⁶⁾は九首のみである。この『中宮上総集』の散佚した部分に、贈答歌の形で入っていたのかもしれない。

家集以外の勅撰集などを見ると、堀河院中宮上総には堀河院在位中の周防内侍との贈答歌があつたりする。

堀河院位におはしましける時、南殿の北おもてに
雪山つくらせ給ふよしをききて、うちなる人に申

しつかはしける

周防内侍

ゆきてみぬ心のほどを思ひやれ都のうちのこしのしら山

返し

中宮上総

きてもみよ関もりすゑぬ道なれば大内山につもる白雪

(新後拾遺・雑秋・八二九、八三〇)

また、堀河院崩御後の歌も見える。

堀河院かくれ給ひてのち花のさかりに、人につか

はしける

中宮上総

ありしよの恋しきままにふるさとの花にむかひてねをのみ

ぞなく

(続古今・哀傷・一四〇九)

堀河院かくれさせ給うてのち、五節に殿上人ひき

つれて皇后宮にまうでたりけるによりみ侍りける

堀河院中宮上総

あはれにも尋ねけるかなありし世にみしもろ人のおもがは

りせで

返し

権中納言師時

あらぬよのとよのあかりにあふ人はみし面かけをこひぬ日

ぞなき

(続拾遺・雑下・一三〇五、一三〇六)

さらに、源俊頼が父経信と筑紫の大宰府に下るときの贈歌が

あるし、『散木奇歌集』には、『堀河院艶書合』の折の贈答歌

が見えている。

大納言経信つくしにくだりける時、俊頼朝臣とも

にまかりければ、かるかやにつけてつかはしける

堀河院中宮上総

別れなんおぼつかなさをかやの思ひみだるる秋の暮

かな

(続古今・離別・八三六)

堀河院御時艶書の会といへる事をせさせ給ひける

につかうまつれる

数ならでよに住の江のみをつくしいつを待つともなき身な

りけり

かへし

中宮上総

ながれてもあふ名はたてじすみの江のみをつくしにてたち

ははつとも

(散木奇歌集・恋上・一〇九八、一〇九九)

ここで、注意されるのは、いずれも上総が「中宮上総」ある

いは「堀河院中宮上総」とあつて、「堀河中宮上総」とはないこ

とである。

一方、皇子の方は「堀河中宮」とある。先にも例を挙げたが

(第一節)、もう少し詞書中の例を挙げてみよう。すべて皇子の

時代の歌人の歌である。

堀河中宮のあふたぎのところにめししかば

夏山のしげきをわくるさを鹿もいかでともしの人たづぬらん

(御所本三十六人集(五一〇・一二) 所収中務集・一二九)

堀河中宮の内侍に物いふほど、あめのふりかかり

ければ

少将藤原義孝

わびぬればつれなしがほはつくれども袂にかかる雨のわび

しさ

(統詞花・恋上・五〇三)

堀河中宮女房より送りける菊歌の返し 同

(五九〇五に「大式高遠卿」)

しろかねとこがねの色にさきまがふたまのうてなの花にぞ

有りける

(夫木抄・卷一四・秋五・五九〇六)

堀河中宮うせ給ひて、御ぶくすぐしてないしのみ

かり出でしが、雨のふり侍りに

故郷は雨とも君はわすれけりけさはふりつる雨はやまじを

(元輔集・一一九)

『新編国歌大観 CD-ROM版』と『新編私家集大成

CD-ROM版』の語彙検索では、「堀河院中宮」および「堀河中

宮」の名を、合わせて五七例見出す(「堀河の中宮」「堀河院中宮歌

合」「堀河院中宮上総」等を含む)。そして、この五七例には、両者

を混同していると思しき例はない。また、『新編国歌大観

CD-ROM版』解題の「校訂表」を見る限り、両者の間の誤りを訂正したということは一切載せていない。底本をそのまま翻刻した『新編私家集大成 CD-ROM版』も混同している例は見出せない。「堀河院中宮」と「堀河中宮」とは明確に区別されていたのであり、別人だったのである。また、皇子の女房に上総という名の歌人は見当たらない。したがって、

また後代のものであるが、『統後拾遺集』(卷十八・哀

傷・1236)には、親の喪に服している上総という女房に皇子

が贈った歌が入集している。皇子は傷心の女房を思いやる

女主人であった。

は事実誤認である。先に述べたごとく、上総に歌を贈ったのは皇子ではなく、篤子内親王である。「堀河院中宮」には、上総という女房歌人が仕えていた。

しかしながら、「堀河院中宮」と「堀河中宮」には、多少の混乱はあったようである。現存する円融天皇の御集としては、宮内庁書陵部蔵『代々御集』(五〇一・八四五)所収本が唯一のものである。『新編私家集大成 CD-ROM版』所引の『円融院御集』の二〇番歌(本稿第一節に引用)の詞書に、「堀河院中宮、をそくまいり給しに」とあって、「堀河院中宮」の「院」をミセケチにしているのがその痕である(『新編国歌大観 CD-ROM版』は、訂

正結果に従った本文を探り、歴史的仮名遣いに直してある。

四

最後に③の『新拾遺集』の歌についてみてみよう。

黒戸のまへに菊をうゑられたりけるを

堀川中宮

③ 咲きぬればよそにこそみれ菊の花天つ雲みの星にまがへて

(新拾遺・秋下・五一九)

この歌にも関連すると思われる歌が存する。

堀川の中宮のうちにさぶらひ給ひしに、うへの御

つぼねの黒戸の前のやり水のほとりに、九月九日

菊をうゑて、女房たちの花もてあそびける折に、

前をわたればよびよせて、近くよれものいはんと

いへば、なにごころなくよりたれば、直衣のつま

をとらへて、女房のきぬにつながひあはせて、歌

をくちぐちによみかけしかば、ねぢけず返しはて

ていまはゆるし給へといひしほどに、官をかしが

らせ給ひて東おもての戸口に召して、笛などふか

させ給ひてかくなむおほせごとありし

咲きぬればよそにこそみれ菊の花げにすきものとけふぞし

りぬる

御返し

はなによりすくとや人の思ふらんころながさは君のみぞ

見む

(大式高遠集・六五、六六)

「堀川の中宮」の周辺の雰囲気をうかがわせる記事である。黒戸の前の遺水のほとりに、重陽の節句である九月九日に菊を植えて女房たちが賞翫している折に、その前を高遠が渡った。女房たちは高遠を呼び寄せ、直衣の褌をとらえて、女房の衣につないで、歌を口々に詠み掛けた。高遠はひねくれることもなく、返歌をし終わって、いまはこれでお許しくださいといったところ、「堀川の中宮」がおもしろくお思いになって、東面の戸口に召して、笛などをお吹かせになつて(筆者注―高遠は笛の能手で、一条天皇の笛の師であつた(枕草子)、歌をお送りになつた。

その歌の上句が、いま問題にしている③『新拾遺集』五一九とまったく同じなのである。そして、このような上句を他の歌人が用いた例を知らない。『新編私家集大成 CD-ROM版』に収められた冷泉家時雨亭文庫蔵『大式高遠卿集』(冷泉家時雨亭叢書64『平安私家集 十二』に影印収載)では、下句が「けにすきものとけふそしりぬる」となつていて、③の歌の本アマツクモキノホシニマカヘテ文が校異の形で示してある。これは上句が同じなので、『新拾遺

集』と同じ歌だと思つたのかもしれない。ともかく、相手と場所によつて、堀河中宮が下句を変えて詠んだものであろう。

次の歌も右の『大式高遠集』の堀河中宮と高遠の贈答歌と時間の前後はあつても、同じ時の歌であるかもしれない。

黒戸の前なる菊を見て

大宰大式高遠

うゑて見るところのなにもにぬもものは黒戸にさける白菊

の花

(万代集・秋下・一一六三)

植えて見る場所の名(黒戸)にも似ないのは、黒戸に咲いている白菊の花であるよという、黒と白の対称に興じている歌である。

この堀河中宮は藤原高遠と同時代の人であるから、円融天皇の皇后であつた藤原嬪子である。嬪子は天曆元年(九四七)〜天元二年(九七九)六月三日(堀河院にて崩御)であり、天延元年(九七三)二月二十九日に入内している。したがつて、右の『大式高遠集』の贈答歌は、それから、おそらく天元二年までの間に行われたことになる。¹⁰⁾因みに、高遠は天曆三年(九四九)に生れ、長和二年(一〇一三)五月没である。

もうひとつ、③の『新拾遺集』の歌には、菊の花を空の星に見立てるといふ発想がある。この発想は漢詩からきたものであり、詳細は小島憲之氏の著¹¹⁾に詳しいので省略する。和歌の方

では、

寛平御時きくの花をよませたまうける

としゆきの朝臣

久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける

この歌は、まだ殿上ゆるされざりける時にめしあ

げられてつかうまつれるとむ (古今・秋下・二六九)

がある。この古今歌は、殿上を雲の上に喩え、そこで見た菊を天の星かと誤つたことですよ、という意である。すでに『古今集』の時代に、菊の花を空の星に見立てることが行われていたのである。また、近いところでは天徳四年(九六〇)十月源高明邸での残菊の宴に侍した時の清原元輔の歌がある。¹²⁾

またのとしの十月に、おなじ大納言の家に残れる

菊を惜しみ侍りける日

ながき夜の星かともみよはつ霜の置きてのこれる白菊の花

(元輔集・一四)

「似^レ星とよむは黄菊也」(『八雲御抄』卷三)というように、白菊の花を星に見立てるのは、あまり例がないのではないかと思われる。それはともかく、嬪子と同時代に、菊の花を夜の星に見立てる歌が詠まれていたことは特筆してよい。

以上のごとく、③の『新拾遺集』の一首は、堀河関白太政大臣兼通女の皇子（円融天皇皇后）の歌であると思われる。

五

これまで見てきたように、①②の作者は「堀河院中宮」すなわち堀河院の中宮であつた後三条天皇皇女篤子内親王であり、③の作者は「堀河中宮」であつた堀河関白太政大臣兼通女の皇子だろうと思われる。

ところが、第一節で見たように、『八代集全註3』は、堀河院中宮を皇子と誤り、しかも①②③の歌をすべて皇子の歌とした。

これは、『勅撰作者部類』「女部」に、

堀河院中宮皇子、忠 続古今集春下 続後拾遺集貞一、

新拾遺集秋下

とある誤りを、そのまま引き継いだものかもしれない。

『和歌文学大辞典』は、「堀河院中宮」を皇子とし、「堀河中宮」を後三条院の皇女篤子内親王としており、やはり誤っている。

このような間違ひはその後もあるようである。

※和歌大辞典

〔犬養廉・井上宗雄他五名編集 明治書院 昭和六一・三〕

堀河中宮ほりかはの 〔平安期歌人〕堀河天皇の中宮篤子。（以ちゅうくう）

下、篤子内親王の経歴などの説明）新拾遺集に一首入集。

千葉義孝氏の執筆

は『和歌文学大辞典』の誤りをそのまま継いでいる。項目名の「堀河中宮」は「堀河院中宮」でなければならぬ。また、『新拾遺集』の一首は「堀河天皇の中宮篤子」の歌ではなく、皇子の歌である。

※深津睦夫 和歌文学大系9『続後拾遺和歌集』の「作者名

索引」（明治書院 平成九・九）

堀河院中宮ほりかわいん 篤子。堀河中宮と称さる。（以下、篤子内親王の経歴などの説明）数多くの歌会・歌合を催した。

続古今集初出。一一三六。

「堀河中宮と称さる」であるが、何を根拠にされたかはわからない。しかし、管見の範囲では篤子内親王を「堀河中宮」と称した例は見当たらないようである。「堀河院中宮」と「堀河中宮」は同一人物ではない。また、「続古今集初出」は誤りではないが、「続古今集と続後拾遺集に各一首」でよかつたのではないか。勅撰集入集歌はこの二集に各一首しかないのである。

※安田徳子 和歌文学大系14『万代和歌集 下』の「作者名

索引」（明治書院 平成二二・一〇）

堀河院中宮ほりかわいん ↓篤子内親王ちゅうくう

篤子内親王とくしなひ、堀河院中宮。(以下、篤子内親王の経歴しんろうなどの説明)堀河院とともに数多くの数奇行事を主催。新拾遺のみ。三五二九

「堀河院中宮」を「篤子内親王」としたのはよいが、「新拾遺のみ」は「統古今」と「統後拾遺」の誤りである。

以上、現存の辞典類、注釈書類には、すべて全体、あるいは一部に誤りがある。「堀河院中宮」と「堀河中宮」は勅撰集においても私撰集、私家集においても書き分けられており、別人である。どちらも天皇の中宮で、似た名称であったために、混同が起こったようである。昔の人はきちんと区別し、書き分けていたのである。

『CD-ROM 和歌文学大辞典』の「堀河院中宮」の項目の末尾に、私は次のような一文を入れている。

『統古今集』『統後拾遺集』に各一首(以上二集は作者を堀河院中宮とする)、『新拾遺集』(作者を堀川中宮とする)の一首は、堀河関白太政大臣兼通女の堀河中宮嬪子(円融天皇后)であろう。

以上、勅撰集入集歌わずかに三首を取りあげてのささやかな論であるが、事実は事実として、今回扱った問題の含むところ

は決して小さくはないであろう。

本稿の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観 CD-ROM 版』に拠ったが、適宜、ひらがなを漢字に改めた。

〔注〕

- (1) 引用は松村博司校注の岩波日本古典文学大系21『大鏡』による。
- (2) 「堀河中宮嬪子の文化圏―歴史に消えた文化圏のひとつとして―」(『国語と国文学』平成二十二年一〇月号)
- (3) 「第二章『大式集』『肥後集』その他」の「I『大式集』とその作者」(『私家集の研究』明治書院 昭和四一・一一)
- (4) 「彰考館蔵中宮上総・皇太后宮大進両家集(残欠)について」(『平安文学研究』二四輯(昭和三五・三) ↓『私家集の研究』(明治書院 昭和四一・一一))
- (5) 久保田淳・近藤みゆき「新編国歌大観 CD-ROM版」中宮上総集」解題」、後藤祥子「私家集大成 CD-ROM版」中宮上総集」解題」
- (6) その場合でも、『中宮上総集』の詞書は、「上総、おや

の思ひにて……」とする『統後拾遺集』の詞書と同じではないだろう。

- (7) 『大式高遠集』では、この歌は「女」が高遠に贈った歌になっている。

- (8) 『新編国歌大観 CD-ROM版』と『新編私家集大成 CD-ROM版』の底本が同一の場合、『元輔集』と『元輔II』、『円融院御集』、書陵部本『中務集』と『中務II』、『相如集』および冷泉家時雨亭文庫蔵本を親本に書陵部蔵本が書写したもので、それぞれが底本になっている場合、『高遠集』は、重複して数えない。また、異なった資料の重出歌は重複して数える。詞書が違っていたりするからである。

- (9) 注(2) 論文

- (10) 皇子が堀河院で崩御したことは、『日本紀略』『二代要

記』によってわかるが、「堀川の中宮のうちにさぶらひ給ひしに」とあるから、この高遠とのやりとりは、堀河院に遷御する前でなければならぬ。しかし、遷御した年月日は不明である。近い時期では、貞元二年(九七七)九月二十八日に遷御したことが、『日本紀略』によつて知られる。

- (11) 「第七篇 奈良朝文学より平安初頭文学へ」の「第三章 結語(一) 詩より和歌へ」(『上代日本文学与中国文学 下』塙書房 昭和四〇・三)

- (12) 藤本一恵『清原元輔集全釈』(私家集全釈叢書8 風間書房 平成元・八)の当該歌の【参考】の項)

(たけした ゆたか・本学名誉教授)